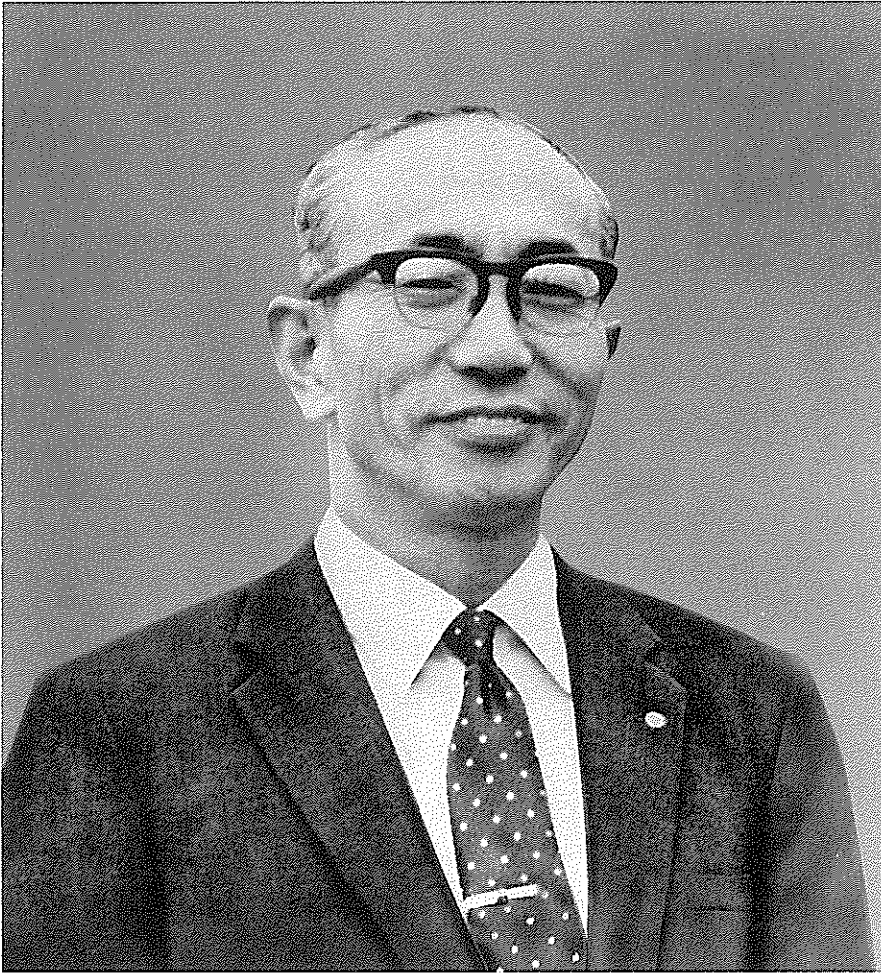


# 指吸千之助物語



昭和55年12月13日。その日は確かにこの冬一番の寒さといつてよかった。

木枯らしが吹き荒れ、時折小雪が舞った。それは、涙よりも切ない思いが空から降ってきているようだった。

指吸グループの創業者・故指吸千之助は、死の10年程前から始めたゴルフを多忙な日々の中で唯一の趣味としていた。それは、生前の彼を知る人をして、仕事一途な一生を時折明るく照らす光明のように、安らかな思い出として甦らせるものであった。

昭和55年3月のある日。

その日も彼は知人のS氏と泉南カントリーでプレーに興じていた。しかし、いつもながら笑い声の絶えない楽しいプレーをするはずの彼の様子がどうもおかしい。心配した友人のS氏が、

「どうかしたんですか？」と聞くと、

「どうも体がだるいし、歯の出血が止まらないんだよ。」

という。見れば、腕のどこどころに向出血の斑点がある。

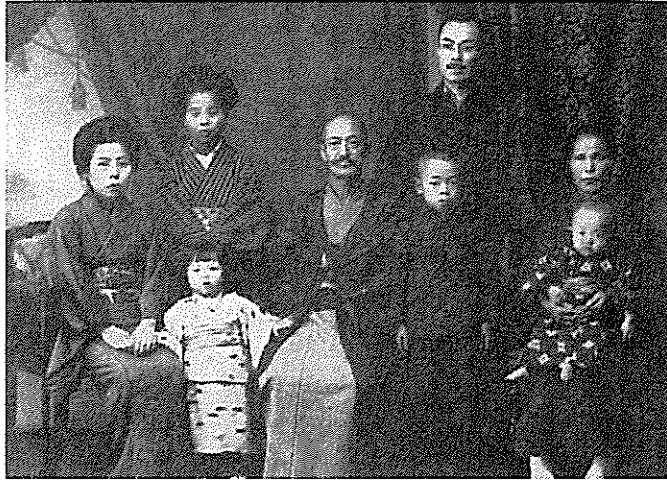
この時すでに病魔は彼の身体をさいなみ始めていた。

その2週間後の4月8日。

突如、大阪市内の北野病院に入院。病名は「急性骨髓球形白血病」。夏に小森を得たが、その年の12月13日、永眠された。家族・親族はもちろんのこと、友人・知人、そして子供に恵まれなかった彼が我が子のように愛した指吸グループの所員達が、その早すぎる死を心から惜しみ、悲しんだ。

「巨星」というよりむしろ「偉大なる平凡人」であった指吸千之助は、真白な雪のベールに包まれ、手の届かぬ彼方へと旅立ったのである。

# 幼年時代



母・ひろ (40歳) 下女・は留 (21歳) 祖父・千太郎 (59歳) 父・善一郎 (39歳) 元乳母・喜み (58歳)  
 姉・美尾子 (4歳) 兄・弥之助 (9歳) 千之助 (3歳)

大正6年8月17日。千之助は、堺の名家、指吸家第13代当主、善一郎の三男として生まれた。

兄弟は長兄・弥之助、次兄・善之助（大正3年死亡）、姉・美尾子、妹・千屋子（千之助6歳の折に死亡）がいたが、相次いで夭折し、成人した者は千之助と姉・美尾子だけであった。

「指吸」という珍しい姓の由来は、「渴しても盗泉の水を飲まず」という心意気を示したものとされている。指吸家の初代・善兵衛が、堺切っつの大きな魚問屋を築き上げ苗字帯刀を許されたときに、「食べるものがなければ、指をしゃぶって辛抱してでも不正不義はせぬ」という家訓を、「指吸」という姓は象徴しているようである。

千之助は一六七一年に歿した初代・善兵衛から数えて、14代目にあたる。実に三百年の歴史を持つ家系に生まれたことになる。

千之助の祖父・12代千太郎

は、家業の魚問屋を弟に譲り、自分は実業界で活躍。明治26年には指吸銀行を創立し、頭取となった。

しかし、明治34年、金融恐慌に遭遇し、銀行は倒産。事業は再起不能に陥り、千太郎は実業界に望みを絶つたのである。

その後、千太郎は、家督を千之助の父・善一郎に譲り、茶道を唯一の趣味として余生を送った。

大正13年、4月。千之助6歳。堺の英彰小学校に入学した。

姉・美尾子さんの話。

「幼い時の弟を思い出しますと、想像も出来ない程、線が細く、色白の丸い目の可愛い子供でした。小学校1年生の時、母が繕った靴下を履かせられた時、足の裏が、つくろいの段で、気持ちが悪く言っているやがるので、母は一生懸命に両手でこすって、平にして履かせるとは、まだ気持ちが悪く言って泣き出すのを、私が学校に遅れるから

無理に弟の手を引っ張って学校へ行ったことが思い出されます。」

このように神経質でおとなしい少年だったが、生来、病弱だった父・善一郎のような蒲柳の質（注：ほりゅうのしつと読む。体質が弱いこと）ほどではなかったらしい。

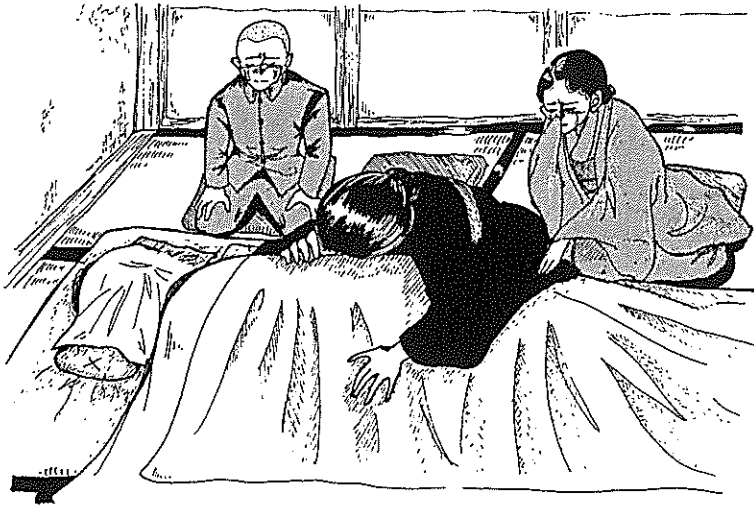
友達とはあまり遊ばなかったようだが、学校から帰ってから草野球をすることもあった。運動といえば水泳が得意で、小学校6年の夏には一〇〇町（約10<sup>キロ</sup>）を見事、泳ぎ切る頑張り屋でもあった。

千之助が僅か7歳の時、父・善一郎が病死。名家に生まれた宿命だろうか、晩年をほとんど病床で過ごし、和歌を心の拠りどころとする生涯であった。

余りに早すぎる父の死であった。時は大正14年である。

父の死という不幸にまわられたが、少年・千之助にももちろんその頃の子供の楽しみ





お母さんが『Wさん、もう勉強すんだんか?』と言われるのが一番こわかったので、おっとすり抜ける様に通り返して裏口から出て行きます。時には一緒に休憩の時など、指吸君がその頃大切にしていた小さいサボテンの各種が珍しく、手に取ってうっかり傷めたときに、指吸君が本当に

怒ったことがありました。私の冗談がすぎたのだと思いません。」  
 勉学に励む一方、運動にも力を入れていた。学校では柔道部に入部。そして水泳は、相変わらず彼の得意とするところであった。  
 この頃の千之助は、まるで指吸家再興の志に向かって自らの身体に鞭をいれているかのようにであった。



(昭・11) 大浜海水浴場にて

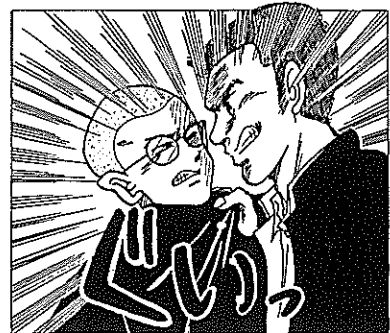
## 関西大学時代

昭和10年4月、関西大学専門部に入学。

当時の友人・M氏の話。  
 「当時の関大はパンカラ風のように外部の人々から思われていましたが、我々のグループはその中で比較的まじめで勉強もまあまあで善良なる学生でありました。」  
 その中でも彼は、胃腸も余り強くなく酒も飲まず健康状態も頑強でなく、きゃしゃな身体でお坊ちゃん育ちの姿そのままでありました。」  
 しかし、正義感あふれる青年でもあったようだ。

姉・美尾子さんの話。  
 「大学在学中のある時、電車の中で、四、五人の大学生がだらしのない服装をして、他の人に迷惑なほど大声で騒いでいるのを見て辛抱しきれず、注意をしたところ、かえって殴られ顔を腫らして帰って来たことがありました。」

昭和13年2月28日、祖父・



千太郎死亡。その年の5月に指吸家の家督を相続する。

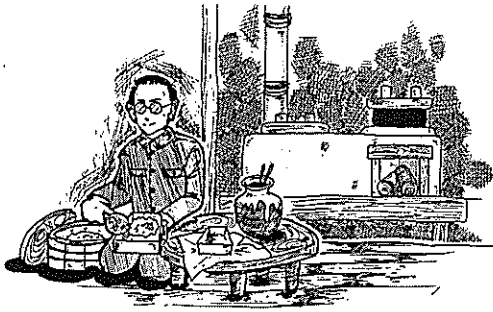
同年4月、関西大学経商学部商業学科に入学。

この経商学部在学中に、千之助は計理士として登録。それが後の指吸千之助計理事務所の前身になるとは、当時彼自身、予測していただろうか。大学2年の夏のことである。千之助がアルバイトとして株式会社を設立したと知って彼を知る友人はみな、一様に驚いた。あのひ弱な彼の、一体どこにそんなエネルギーがあったのだらう。計理士としての資格はとったものの、実

務的なことは全然知らなかったはずだからである。

この頃の千之助は、昼間は大学に通い、夜は夜で近所の呉服屋さんや建具屋さんの帳簿つけのアルバイトをするという大変な毎日であった。文字通り、一家の生活を支える日々であったに違いない。

丁度その頃、姉・美尾子の結婚が決まった。人一倍姉思いの千之助が喜んだことは言うまでもない。



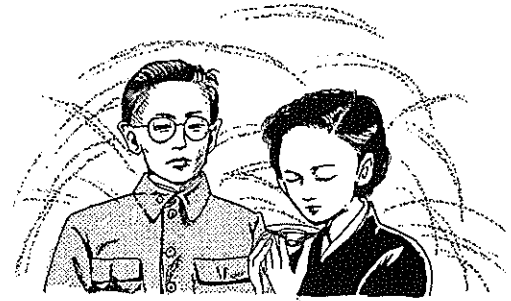
## 就職と結婚

太平洋戦争勃発の昭和16年。

有名な真珠湾攻撃はこの年の12月8日のことであった。3月に関西大学経商学部商業学科を卒業した千之助は、4月に東洋製罐に入社したもののすぐに同社を退社。同じ年に更池銀行（現・三和銀行堺支店）に入社した。しかし、これも長くはなかった。母思いの千之助は、転任の多い銀行勤めをわずか3年ほどで辞めている。生来決して丈夫でなかった母・ひろへの孝行は、姉・美尾子が嫁いだ後、一層深いものとなった。

銀行を辞めた千之助は、大阪府勤労動員課に入り、堺の勤労動員署に配属された。千之助は、母親のお昼ご飯を作って出勤する毎日だった。出かける前には必ず母に声を掛けていた。

「お昼のご飯はちゃんと作ってありますから食べてください。」



仕事から帰ってからは、2人分の食事を作り、後かたづけをするのが彼の日課であった。

こんな慎ましい暮らしの中で、千之助は生涯の伴侶・愛子と知り合う。愛子も千之助と同じ動員署で働いていたのである。

ふたりにどんな交際があったのか、それは今となっては定かではない。しかし、愛子が千之助にとって、生涯たったひとりの愛しい女性であったことは、現在も多くの友人・知人が認める事実である。

## 創業



(昭・21) 創業の頃の神明町事務所

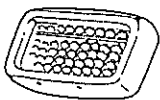
終戦の年、昭和20年4月29日。指吸千之助は、安藤定次郎の長女・愛子と結婚した。その4ヵ月後に、日本は敗戦を迎える。まさに、混乱のさなか、若きふたりは、船出のイカりをあげたのである。

翌、昭和21年4月。指吸計理事務所、開所。

病弱の母と、新婚の妻をかかえ、千之助は、事業家への第一歩を踏み出した。

当時の計理士は、先生然として、客の方が事務所へ訪ねていって帳簿を見てもらうのが普通だった。ところが、千之助は、自ら自転車に乗ってこちらから顧問先へ出向いて

いった。堺市内はいうに及ばず、遠く泉北までも出かけることもあった。当時としては画期的なことだったのである。この気さくさが、創業当時はわずか8件であった顧問先を飛躍的に増大させることになった。



# 事業拡大

昭和23年3月、堺市南翁橋に事務所を新築し、移転する。同年4月、計理士・税務代理士指吸千之助事務所と改称する。

さらに昭和25年4月、顧問先の要望により大阪市内に従来の事務所を増設。多忙な日々が続いた。質素だった千之助の生活も、この頃から次第に変化のきざしを見せ始める。

大阪から堺まで、タクシイに乗るような「贅沢」をするようになり、友人との外食も楽しむようになった。

しかし、無理がたたり、脾臓炎で3カ月間、自宅療養をする。

昭和25年、青色申告制度が始まる。

翌26年、税理士登録。この頃から戦後の物資の統制なども徐々に解除され、インフレーションの脅威も去り、企業経理も落ち着きを取り戻し始

めていた。

指吸計理事務所は、その頃堺商工会議所とタイアップして、会議所内に税務経理相談所を開設、企業と個別に相談にに応じていた。また、この頃は、毎月一回計理研究会を開催して戦後の新しい税法や経理実務を勉強した時期でもあった。

日本経済が破滅的な混乱から立ち上がる復興の時期。指

吸事務所は、もつばら、税務会計と記帳決算指導が業務の中心となっていた時代であった。

そして、この頃から毎年顧問先が増加。千之助にとつては、仕事に追われる毎日が始まったのである。

そして、戦後から10年。GNPの成長が世界の注目を浴びるようになった昭和30年代。千之助は、現在の本社の地に

鉄筋コンクリート造2階建を新築した。平成

2年4月に取り壊された記憶もまだ新しい旧堺事務所が、この時、建設されたのである。時は昭和33年であった。



# 事業展開

(昭・33) 堺事務所落成



堺事務所を新築した頃から千之助の頭の中には、新しい事業の計画が着々と立てられていた。この頃は、その青写真を次々実行に移す活気に溢れた時期でもあった。

顧問先に対しては、従来設けていた「経営管理相談室」を「管理部」に発展させ、資金計画、利益計画、労務管理や支店・子会社の管理など、「管理会計」に関する顧問先の要望に応える体制造りを行

った。

また、内部的には、企業としてのあり方を明確にするため、「総合会計事務所の建設」と「協同事務所の建設」というふたつの理念を明文化したのも、この時である。

もはや、千之助を一会計事務所の所長と呼ぶことはできない。

そう、既に彼はこのとき、事業家を目指していたのである。

早くに父親や兄に死に別れ、また没落したとはいえ、堺の旧家のほんほん育ちであった千之助が、なぜこんな意識を持つようになったのか、そのナゾの解明の手掛かりにつきのふたりの証言を引用する。

佐久間会長の思い出より…。「入所後数年間、ほとんど接触の折もなかった私が、はじめて指吸所長と直かに話をする機会をもつたのは、確か昭和38年春ではないかと思う。

……中略……

例の早口で幾らか聞きとり難い小さな声で、あらまし次のような内容のお話があった。自分は開業以来数人の税理士を育て独立させてきたが、この繰り返しでは会計事務所の規模に一定の限界がある。これからの時代は、今までのような単独事務所では顧問先の要望に応じていけない。何人かの資格者がそれぞれの専門知識をもち、協力してこそ会計事務所の発展があるのでないか。……中略……

佐久間君もぜひ事務所止まって協力してほしい。とくに経営管理という新分野で力を貸してもらいたい。……こんな主旨だった。」

「永年の友人、K氏の証言。彼は少年時代から親孝行、忍耐心、道徳心の高いものを持つていた。すべてを忍び、すべてを耐えていたので、人より早くアガペーの心を身につけていたと思われた。」

（「アガペー」とは、聖書にいうところの与える愛、育てる愛、自己犠牲的な愛、親子を育てるときの愛をいう。）K氏はさらに言う。

「公認会計士、税理士は一匹狼で独立できるにもかかわらず仲良く団結して指吸グループとしてまとまっていることは不思議であったので、生前の彼にズバリ質問してみたことがあった。彼は私に心の中を語ってくれた。

『私には子供がない。従って私の事務所働いて下さっている者が私の子供と思っ

ます」と。」

千之助は、自分が開いてこ今まで大きくした事務所を、個人のままで終わらせる考えがなかったことが、よくわかる。彼にとつて従業員は子供であり、年々増加する子供たちのために、彼は日々事業を拡大することを考えねばならなかった。それは、まさに千之助のアガペーの心であったといえよう。

そんな自己犠牲的な千之助が、のちに大きな試練の場となる堺経理専門学校を開校したのは、昭和36年4月のことであった。



## 学園紛争の嵐

昭和43年の東大安田講堂事件という、昭和20年代に生まれた者たちは、あの嵐のような学生運動・学園紛争時代を思い出すにちがいない。事業が順調に拡大し、学校経営に手を染めた千之助もまた、この激しい破壊の洗礼を受けたのである。

昭和36年3月、千之助は今の大阪商業大学附属堺高等学校の前身である堺経理専門学校を、堺市中安井町に創設した。

この経理専門学校は数年にして知名度が高まり、入学希望者が増加し、応募者を受け入れきれない状態になった。そこで昭和39年、堺市堀上町に校地7千坪を買収、翌年堀上校を開校するまでに発展したのであった。

堺校をはじめ堀上校の開校にあたっては、言語に絶する関係者の不眠不休の苦勞があったことは想像に余りある。当時、用地買収にあたった現・財務部、安藤氏の証言。



「ほとんど家に帰らない毎日が続きました。車の中で寝ていたのです。夜、一戸一戸、個別に訪問して売ってくれるようお願いするのですが、買取を妨害するヤクザの家にも行きました。一人二人は意外におとなしく紳士的でしたが、やはり緊張しましたね。」

その後、保護者や地域から高等学校設立の要望が高まり、私財を投げ打って、昭和43年3月、学校法人清陵学園を設立、堺経理高等学校を開校するに至った。

この新設高校の開校と前後して、千之助に大きな試験が降りかかった。

当時、各地の大学、高校では学園紛争が流行風邪のようにまきおこっていた。清陵学園も例外ではなかった。

教員の中の数人が、教職員組合の組合活動を装いながらベトナム反戦・日本国の革命を叫んだ。その目的達成のためには手段を選ばず、専門学校在校生を煽動して、学校施設の破壊に及んだ。

混乱と無秩序、暴力と破壊の嵐が学園を覆った。

得意先の会社が求人難で採用に困っているのを見て、人材を育成して確保し、また、事務所員の老後の仕事に：という千之助の宏大な構想は、こうして徹底に砕け散った。

## 創業 25周年

昭和40年代後半。不足する若年労働力、毎年激しい率で上昇する人件費によるコスト圧迫、土地住宅問題、公害問題など、日本経済は一つの転換期にさしかかっていた。

昭和39年、「情報化時代」の幕開けとともに、基本理念具体化の第一歩として堺興産(株)を設立。続いて翌40年には堺計算センター(株)が、また、

昭和46年12月には現在グループの中核をなしている指吸会計センター(株)が、堺興産(株)によって設立された。

指吸千之助が最も情熱を注いだ「協同事務所」の建設にむけて、確固たる一歩を踏み出したのである。

いまや彼の事務所は、「税務会計」「管理会計」というふたつの時代を経て、その上に何ものかをプラスしなければならぬ。「第三の時代」に入りつつあったのである。

当時のことを佐久間会長はこう語っている。

「……指吸所長との間で積極的に更に深く触れ合いを感じ始めたのは、事務所が創業25周年を祝った昭和46年頃からであった。この年8月にはかのドルショックで日本経済が未曾有の衝撃を受けたのだが、事務所もコンピュータによる記帳事務の合理化を軸に体質改善運動に取り組んだ記念すべき転換の年である。」

この年の11月、胃潰瘍と診断される。永年の無理がたた



(昭47・6)堺計算センター落成

つたのと、時代の急速な転換が彼の身体を蝕んだのかも知れない。

更に、昭和47年の石油ショック。猛烈なインフレと不景気は、彼の事務所にも大きな苦しみを強いた。だがこの苦境も、コンピュータ活用による企業会計と学校会計の事業展開により見事に克服していた。

「第3の時代」はこうして幕開けしたのである。

## ゴルフの 思い出

指吸千之助が書いている書物、あるいは千之助について書かれている書物は2冊ある。

1冊は「計理士・税理士指吸千之助事務所」発行の「創立25周年記念誌」であり、もう1冊は「指吸千之助追想録編集委員会」発行の「指吸千之助追想録」である。後者の本では、千之助が生前親交厚かった友人・知人が故人の思い出を綴っている。そして、そのうちかなりの方々が、千之助とゴルフの思い出を懐かしく語っているのが印象に残る。仕事一途の千之助の人生のなかで、ホッと肩の力を抜けるくつろぎの時として誰しもが感じ、またそれを喜ばしく思っていたことでもあったに違いない。

何人かの方々に、ゴルフの思い出を語っていた。S氏。

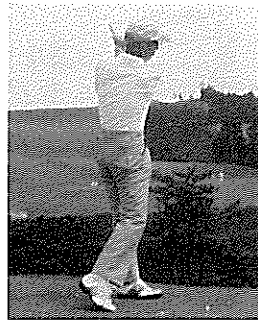
「……後年彼は健康を悪くしゴルフを始めました。彼はゴルフを何よりも一番楽しみにしていましたし、特にハンデ36のよきパートナーとして、しばしば誘いを受けよく方々へ案内してもらいました。」

ゴルフをプレイしている時の彼は、初めから終りまで笑いに満ちた楽しいひと時であり、いかに私達のゴルフは珍プレイの連続であったかご想像におまかせします。私は彼に事業の方も皆に任せて、好きなゴルフもより多くやり、気楽になつたらどうかとしばしば言いましたが、彼は65才まで頑張る、後わずか1年位だから、と常に言っていました。

顧問先M工業(株)M社長の話。「たしか10年程前でしたか、健康のためゴルフを始めるようにお勧めいたしました。そのためにもゴルフ同好クラブ

のようなものを作りムリヤリに引つ張りこみました。」

先生は最初ゴルフに難色を示されておられましたが、だんだんやっけていくにつれ楽しくなつて、唯一の娯楽として本当に喜んでいただき、先生より絶えずおさそいがかかり、こちらがお断りに困る位にま



でこよなくゴルフを愛されるようになり、よく車でご一緒させていただきました。

スコアよりプレイを楽しむ方で私もそうでしたから何かと気が合い、今でもご一緒にプレイしている時の姿を思い浮かべると、その時の楽しそうな情景が昨日のように浮かんでまいります。」

大阪商業大学教授S氏の話。「……私が学位をもらつたときお祝いに來られて、玄關先にゴルフのバッグが置いてあるのを見られ、『ゴルフおやりですか』の話から『一緒に一度ゆきましよう』となり、はじめてPLカントリーへご一緒したのである。失礼ながら、技量は大了ことはなかつたが、私もまだビギナーであつたし、兄貴分としてよく教えていただいたものである。」

……中略……

指吸さんが入院されてからもまだ、白血病であるとは聞かされておらず『早く退院してゴルフをしたい』と言つておられた。亡くなる12月にも、お見舞いしたとき『春になつて暖かくなつたらゴルフができると思う』といわれ、奥さんやお姉さんを涙ぐませたようである。」

亡くなる年の7月。小康を得て1月ほど仮退院をした千之助だったが、もはや愛用のクラブを手にするのはできなかつた。

## 名 譽 職

昭和51年から亡くなる年の昭和55年まで、千之助はつぎつぎと名譽職に就任している。おもなものを列挙すると以下のとおりである。

昭和51年6月 納税貯蓄組合大阪府連合会理事に就任。

昭和52年1月 (社)堺納税協会副会長並びに個人部会長に就任。

昭和53年4月 堺商工会議所副会頭を辞任、参与に就任。

昭和54年6月 大阪府税審議会委員に就任。

昭和55年4月 堺納税貯蓄組合連合会会長に就任。

大阪家庭裁判所家事調停委員を任命さる。

(同年7月 依願退職)  
元來晴れがましいことをあまり好まなかつた千之助が、

この5年の間につぎつぎと名譽職を引き受けた理由は何だったのだろうか。

千之助がそれまで辞退していた堺商工会議所の議員に就任したのは昭和36年10月のことである。議員を1期務めたのち、39年には常議員に、44年には副会頭に就任した。しかし、53年4月、「都合により副会頭の職を辞したい」との申し出をし、その職を辞した。「都合」とは何か。顧問先社長K氏はこう語っている。「……お得意先、顧問先の経営環境が厳しくなつたのでお得意先に専念してお手伝いせねばとの理由で52年夏、ご相談にお見えになつた。その時(辞める)タイミングに就いて助言した事があるが辞任の決心は固く、故に専務理事に指吸君の考え方を伝え善処方に腐心した一コマもある。結局、翌年春まで(辞めるのを)お待ち頂いた。」

顧問先の信頼を第一に考える彼にとっては、会議所の副会頭の要職を辞すことにもそ

れ程の躊躇はなかったようだ。心は既に決まっていたのである。

にもかかわらず、である。人々は千之助を名譽職から完全には解放してくれなかった。誠実そのものといった人柄が災いしたという言い過ぎかもしれないが、名譽職は彼を追いかけた。

しかし、千之助はただ逃げただけではなかったのかもしれない。25周年記念誌にこう書いている。

「……私どもはこの25年のうちから何か「歴史の教訓」——してはならないこと、しなければならぬこと——を汲みとって、今後の事務所の行きかたを考えて行きたいと思っております。……」

「……当時私は事業に対し目標を建てました。その一つは今も健在であります。同業の大先輩であられるY先生のように、早くなりたいたいということでありました。……中略……第二は、職業会計人として顧問先各位をご指導申し

上げる立場に立つて、いかにして皆さんのご信頼にこたえるべきかを考えました。まず低廉にして親切な指導をさし上げるといふことを念願としました。またおいおいと所員の数がふえてくるにつれ、どこのお店には誰を担当させるか、いわゆる適材適所ということをたえず念頭において、事務所全体としての指導能力を最高に発揮したいと考えてきた次第であります。その他職業柄たえず接触する税務官庁をはじめ各官庁に対してもご信頼を得るといふことを念願として参りました。」

当然といえば当然だが、彼が名譽職を引き受けるのは、彼自身の名譽のためだけでなく、彼の顧問先のため、彼の所員のため、そして彼の事業のためであった。



国税庁長官よりの感謝状 (昭・55・11)



## 雷鳴轟く日に

昭和55年12月13日。天はついに千之助の魂を召された。死の直前の様子を、佐久間会長はこう語っている。

「連日40度近い高熱の苦しみの中でも所長の頭からは常に事務所のことが離れなかったであろう。」

稍小康をえられてから数回許された私との短い時間の面会を待ち兼ねたように、所長がせわしなく語られた言葉の数々が印象深く記憶に残っている。『佐久間君、心配かけてすみません。僕は絶対に病気に負けません。必ず元気になるから心配しないよう所員の皆さんによく伝えて下さい。』『世の中はどんどん変わってゆくんだから事務所の

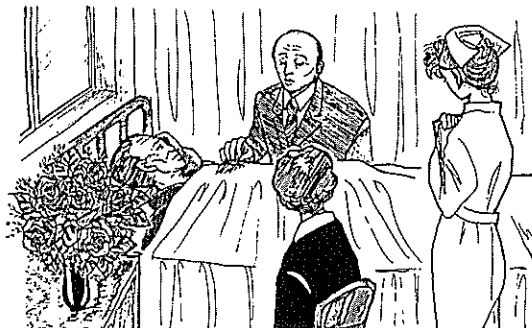
理念がいつまでも同じではおかしい。共同事務所の発足をみたこの機会に一つ新役員のフレッシュな感覚を活かして見直してみてもどうだろう。』『若い人たちが将来に希望のもてるような事務所を作るのが僕ら経営者の責任ではないだろうか』……中略……

憶えば束の間の短い面会であつたが、この限られた時間が私に遺したものは無限の重みをもって胸中深く刻みこまれている。……中略……

12月に入り病状益々重く、11日夕方容体急変の知らせで駆けつけた私に、最後の力を振りしぼって、事務所の後事を託す旨の言葉があつた。

……中略……翌12日早朝已むなき所用で遠方へ出張するに先んじ、あるいはこれが今生の別離になるやも知れぬと挨拶に伺うと『気をつけてな』と労りの言葉をかけて下さるその心くばり。生死の境に呻吟しながらなおこのような言葉が口をついて出る心のやさしさに私は

胸をつかれ涙に咽んで佇むばかりであつた。その夜が遂に永久の別れとなったが、実に厳肅で見事な人生の幕引きであつた。最後の瞬間まで衰えることのなかった強靱な精神力。意識のある限り消えなかつた他人へのこまやかな心遣い。事業家として大を為された指吸所長の心髄に触れる思いであつた。」





外は雷鳴が轟き雪が舞っている。

功なり名を遂げたはずの千之助だったが、その周辺には常に孤独の影がつきまといつていた。それは、あまりに早すぎる死が、我々にそう思わせるのだろうか。

部屋の外の木枯らしは、まるで千之助の胸の中の孤独がようやく「死」によつて身体の外へ解放されたかのように吹き荒れていた。

指吸千之助が、わが子のようになつた所員に語つてゐるつぎの言葉で、この物語は終わる。

「……前略……この機会に現代の若い世代の皆さん方に人生の先輩として次のことを申し上げたい。……皆さんは今自ら選ばれた職業についておられる。その職業は今の皆さんにとってかけがえのない職業ではないか。とするならば今のまま、この現在についておられる職業に自己の全精力を投入して生きることが本当に人間として生きる道でありませう。もしそうでなければ、皆さんは人から使われる将棋の駒になつてしまふ。将棋の駒には人生に対する感動も感激もない。おそらく悲しみすらないのでないか。

……中略……

それからその次に考えていることは、経営者は常に孤独であるということでありませう。

……中略……

経営者は一つのことに関して判断する場合には常に自己の責任において行わなければならぬ。

……中略……

たとえ10人の部下が皆反対の意見を表明したとしても自分の考えに間違いがないということが四圍の状況、長期の見通しからして判断されるならば、それに向かつて『進め!』という号令をかけなければならぬ。経営者はそういうときに感じる孤独に耐えられるものでなければならぬのである。それは、いま自分が企図していることは単なる損得ではない、世の中の真実に向かつて進んでいるのである。自分の行為は先人に対して、同時代の人に対して、また後世に対して恥ぢないという自信をもつことが必要なのであります。

……中略……

そういうことから私は偉大な経営者とは、利益と真実を一致させる人であると考えております。」

平凡にして偉大、冷徹にして誠実な事業家、指吸千之助昭和55年12月13日、午前3時42分、永眠す。享年63歳。早すぎる死であつた。

そしてはやくも13回忌を迎える。

### 作者あとがき

指吸千之助氏が亡くなられて、はや12年の歳月が流れようとしています。創業者を知らずに入社した社員の数が、いつのまにか全社員の約半数に達しました。

私事にわたりますが、私が入社したのは昭和55年の10月13日。千之助氏が亡くなられる丁度2カ月前です。初めておめにかかった時は既に病院のベッドの上でした。いわば私は千之助氏が採用した「最後の社員」だったのです。

広報の仕事に携わるようになって「指吸」という名前由来に触れるたび、創業者の足跡を、千之助氏を「知らない

「了」

い世代」にわかりやすく伝えたいと思つていました。その目的が達成されているかどうかは、読者である特に若い世代のみなさんの判断に待つとして、千之助氏が私という「最後の社員」に指示した「最後の仕事」は、いまここに漸く完成をみました。心からご冥福をお祈りします。

平成4年11月

### 監修

安藤 理夫  
川村 敏之  
佐久間 進  
堀内 英雄  
松尾 堅三  
(敬称略 五十音順)

### 作

鈴木 淳子

### イラスト

平木 靖子

### 企画

広報 室